

使徒の働き11章 「ユダヤ人と異邦人の一致」

1A 恵みの受容 1-18

1B 律法主義の問題 1-3

2B 天からの幻 4-17

3B 神への賛美 18

2A 霊的奉仕と物質的奉仕 19-30

1B エルサレムからの宣教者 19-26

2B ユダヤへの救援 27-30

本文

使徒の働き 11 章を開いてください。著者ルカは、10 章で起こった、コルネリウスの一家が主イエスを信じて、聖霊のバプテスマを受けた話を、ペテロが仲間のユダヤ人信者に弁明している場面を書き記しています。繰り返しになりますが、けれどもそれだけ重要な出来事とルカはみなしているのでしょう。イエス様は、弟子たちに対して、「**マタイ28:19あらゆる国の人々を弟子としなさい。**」と命じておられ、また、聖霊の力は、「**1:8 さらに地の果てまで、わたしの証人となります。**」という約束がありました。

ですから、ユダヤ人の弟子たちは、異邦人に対しても福音を宣べ伝えるべきなのです。ところが、ユダヤ人には、異邦人とは付き合わないというきまりが出来ていました。その伝統があまりにも彼らの心と意思に浸透しているので、それを乗り越えるのは並大抵のことではありません。ペテロ自身が、このことについては他のユダヤ人と全く同じでした。その壁を乗り越えさせるために、神はことさらに、はっきりとした印を与えられて、神は異邦人にも同じ救いを与えたいのだということを示しておられるのです。そして、これまでユダヤ人主体の教会から、異邦人主体の教会が誕生します。アンティオキアにある教会です。そして、彼らの間にも交流が生まれました。キリストの平和によって、彼らが一つになることができたのです。

1A 恵みの受容 1-18

1B 律法主義の問題 1-3

¹ さて、使徒たちとユダヤにいる兄弟たちは、異邦人たちも神のことばを受け入れたことを耳にした。

² そこで、ペテロがエルサレムに上って来たとき、割礼を受けている者たちが、彼を非難して、³「あなたは割礼を受けていない者たちのところに行って、彼らと一緒に食事をした」と言った。

彼らは既に、サマリア人が神のことばを受け入れたことを聞いて、ペテロとヨハネを遣わしている経験があります。サマリア人は、半分、ユダヤ人の血が混じっていて、あくまでも自分たち、ユダヤ

人の世界であるという認識がありました。しかし、異邦人たちも神のことばを受け入れたことを耳にします。これは彼らにとって想定外です。

ペテロは、自分がエルサレムに戻ってきたら予想をしていたことでしょう、覚悟をしていたに違いありません。「割礼を受けている者たち」というのは、ユダヤ人たちのことです。アブラハムに命じられた、男子の性器の包皮を切り取る儀式を行って、契約の民になることの印として考えていて、それがない無割礼の者たちは、神から遠く離れた者たちであるとみなしていました。パウロが、異邦人とはどういう存在なのかを、エペソの人たちに説明している文があります。「2:11-12 ですから、思い出してください。あなたがたはかつて、肉においては異邦人でした。人の手で肉に施された、いわゆる「割礼」を持つ人々からは、無割礼の者と呼ばれ、そのころは、キリストから遠く離れ、イスラエルの民から除外され、約束の契約については他国人で、この世にあって望みもなく、神もない者たちでした。」

彼らの抗議は、異邦人が神のことばを受け入れたことではありませんでした。そうではなく、「あなたは割礼を受けていない者たちのところに行って、彼らと一緒に食事をした」ということです。当時、今も中東の文化には色濃く残っていますが、一緒に食事をするということは、一つになることを意味します。聖書には、契約を結ぶために一緒に食事をすることもあるほどで、一つになり、平和を結ぶことを意味していました。ですから、キリストの聖餐はキリストと私たちが一つになることを意味していて、また同じパン、同じ杯を手にすることによって、キリストにあって私たちが一つになることを示しています。彼らの頭の中では、あってはならないことであり、サマリア人までは許容できました。なぜなら、彼らが主に立ち返って、真実のユダヤ教に立ち戻るという意味合いで受け入れられたからです。しかし、異邦人は論外です。それで、「ペテロよ、あなたは一線を越えた！」というような抗議をしたのだらうと思います。

ペテロ自身も、このことは良く知っています。後に、アンティオキアの教会で、彼は、割礼派のユダヤ人がエルサレムから来た時に、異邦人信者と食事をいっしょにしていたのに、その席から離れてしまい、いつの間にかバルナバまでが離れてしまいました。教会の指導者として、これはあってはならないことだと察知したパウロは、面前で福音の真理に基づいて動いていないと非難したのです(ガラテヤ 2:11-21)。

主の御霊は、私たちのこれまでのしきたりや慣習を越えて働かれます。神の福音は、恵みの福音であり、イエスを自分の主と信じることによって、そのままの自分で救われます。すべての人が神の前で罪人であり、すべての人が神の恵みによって、信仰を通して救われます。ところが、それを実践するのが難しいです。

アメリカで、ヒッピーの若者が大勢、救われていった時に、カルバリーチャペルには多くのヒッピー

一が礼拝に集ってきました。お風呂には入っていませんし、裸足ですし、またマナーがなっていません。それでも、主が呼んでくださった人たちだとして、愛をもって受け入れていきました。けれども、一部に反対する人たちもいたのです。「髪の毛を洗って、足を洗ってからここに来させるべきだ。」という意見です。主の御霊が新しいことをしておられるのに、今までのやり方が邪魔しているのです。そして、牧者チャック・スミスは興味深いことを話していますが、そうやって反対する一部の人たちは、主に明け渡した生活をしているわけでは必ずしもなく、祈り会にも来ない、反対だけすると言っていました。

2B 天からの幻 4-17

⁴そこで、ペテロは彼らに事の次第を順序立てて説明した。

彼らの抗議は、人から伝え聞いたものですから、今ここでペテロ本人が順序立てて説明します。

⁵私はヤッファの町で祈っていました。すると、夢心地になり、幻を見ました。大きな敷布のような入れ物が、四隅をつり下げられ、天から降りて来て、私のところに届いたのです。⁶ その中をよく見ると、地の四つ足の動物、獣、這うもの、空の鳥が見えました。⁷ そして、『ペテロよ、さあ、屠って食べなさい』と言う声を聞きました。⁸ しかし私は、『主よ、そんなことはできません。私は、きよくない物や汚れた物を、まだ一度も口に入れたことはありません』と言いました。⁹ すると、もう一度天から声が返って来ました。『神がきよめた物を、あなたがきよくないと言ってはならない。』¹⁰ このようなことが三回あって、すべての物が再び天に引き上げられました。

ペテロが、この話で強調しているのは、「神からのもの」「天からのもの」ということです。まず、幻を見たことを語っています。ペテロ自身は、汚れた動物を食べることはできません、と抵抗しています。しかし、神が清めたものだという声だったのです。しかも、それが確認のために三回もあったということです。

¹¹ すると、なんとちょうどそのとき、三人の人が私たちがいた家の前に立っていたのです。カイサリアから私のところに遣わされた人たちでした。¹² そして御霊は私に、ためらわずにその人たちと一緒に行くように言われました。そこで、ここにいる六人の兄弟たちも同行して、私たちはその人の家に入りました。

ここでペテロが言いたいのは、タイミングと御霊の語りかけです。天の幻があったちょうどその時に、カイサリアから遣わされてきた人が来たのです。そして、ためらわずに行けと御霊に命じられたのです。自分ではなく、神がなさっていることなのだとことを強調しています。

さらに、これは大きな事件になるかもしれないと察知して、ペテロは、二人だけの証人でよいとこ

ろ、その三倍の六人の証人を連れて行ったのです。「ここにいる六人の兄弟たち」と言っていますから、その証言できる兄弟たちが目の前にいるということです。

¹³ すると、その人は、御使いが自分の家の中に立っているのを見たこと、そして次のように語ったことを私たちに話してくれました。『ヤッファに人を遣わして、ペテロと呼ばれるシモンを招きなさい。
¹⁴ その人が、あなたとあなたの家の者たち全員を救うことばを、あなたに話してくれます。』

10 章にはありませんでしたが、コルネリウスに御使いが、「あなたとあなたの家の者たち全員を救うことばを、あなたに話してくれます。」という言葉語っていました。異邦人でありながら、彼らを救う言葉なのです。

¹⁵ そこで、私が話し始めると、聖霊が初めに私たちの上を下ったのと同じように、彼らの上を下ったのです。¹⁶ 私は主が、『ヨハネは水でバプテスマを授けたが、あなたがたは聖霊によるバプテスマを授けられる』と言われたことばを思い起こしました。

コルネリウスとその一家が、まさに彼らが五旬節の時に体験したことを体験しました。聖霊に満たされて、異言を語ったりしたのです。ここで大事なことは、単なる現象だけではなく、主イエスのお言葉です。「ヨハネは水でバプテスマを授けたが、あなたがたは聖霊によるバプテスマを授けられる」という約束です。主の言われたことを思い起こすことによって、初めてこの現象が主からのものであることを確認したのです。主が、このように語られたのだから、これは神からのものだという確信を得たのです。私たちも、多くの現象の中で、それが主の語られた言葉、また主のご性質に沿ったものであるということで、神からのものだと、その業をほめたたえることができます。

ところで、聖霊の働きについて、次のような教えが教会の一部にあります。「異言や預言などの、超自然的な聖霊の働きは、使徒時代だけのものであり、聖書がまとめられた後は必要なくなった」とするものです。けれども、使徒の働きはその反対を証していると思います。使徒たちや弟子たちに初めに下られた聖霊が降られるという出来事が、サマリア人の間でも繰り返され、また今、コルネリウス一家の間でも繰り返されたのです。そして、ペテロが初めに自分たちに聖霊が降られた時に、こう言ったのです。「2:39 この約束は、あなたがたに、あなたがたの子どもたちに、そして遠くにいるすべての人々に、すなわち、私たちの神である主が召される人ならだれにでも、与えられているのです。」これは聖書時代のものだと制限してしまう動機は、結局、自分が体験していないから、というものなんですね。自分の理解や体験で、神の御霊の働きを制限してはいけません。

¹⁷ ですから、神が、私たちが主イエス・キリストを信じたときに私たちに下さったのと同じ賜物を、彼らにもお授けになったのなら、どうして私などが、神がなさることを妨げることができるでしょうか。」

ここがペテロの最も言いたかったことです。自分は神のなさることを妨げることはできない、ということ。私たちはちょうど、イスラエルの民を出させようと神がしておられるのに、それを妨げているエジプトの王ファラオのようなことをしてしまう傾向があります。ファラオは、自分の国にイスラエル人がいて、彼らは増えて強くなってきたので、労役を課すことによって彼らを治め、また労働力を得ると考えました。それを手放せという神の言葉を妨げようとしていたのです。けれども、結果は燦燦たるもの、十の災いがエジプトに下りました。

私たちの挑戦、課題は、神の働きが起こっていないと思っていて、実は既に起こっているのに、神が御霊によって行おうとされているのに、それを自分たちの理解や行動によってかえって妨げている、ということがあり得るということです。キリスト者ならば、リバイバル、霊的な覚醒が起こってほしいと願っています。多くの人が救われてほしいと願っています。けれども、実は、本音は自分の心地よいところで収まってほしいと願っているかもしれません。救われる人が増えれば、それだけで自分は愛によって仕え、自分を無にして仕えなければいけません。自分のことを構ってくれる人はいなくなります。それを拒むかもしれません。自分の嫌いな人、自分には受け入れがたい人が、神のものにされることを意味します。ヨナが、ニネベの人々が救われることを拒んで、タルシシュ行きタルシシュの船に乗ったように、です。

3B 神への賛美 18

¹⁸ 人々はこれを聞いて沈黙した。そして「それでは神は、いのちに至る悔い改めを異邦人にもお与えになったのだ」と言って、神をほめたたえた。

これでようやく、エルサレムにいるユダヤ人信者が、異邦人にも同じ悔い改めを与えておられるのだと、神をほめたたえています。ここは、エルサレムにある教会、ユダヤ地方のユダヤ人の信者が、異邦人の信者と神にあってつながっていることを悟る瞬間でした。「I コリ 12:26 一つの部分がたつとばれれば、すべての部分がともに喜ぶのです。」とあるとおり、キリストの体として異邦人の救いを喜んだのです。ここから、ペテロの体験ではなく、教会として、ユダヤ人と異邦人がキリストにあって一つなのだという理解が始まります。

2A 霊的奉仕と物質的奉仕 19-30

1B エルサレムからの宣教者 19-26

¹⁹ さて、ステパノのことから起こった迫害により散らされた人々は、フェニキア、キプロス、アンティオキアまで進んで行ったが、ユダヤ人以外の人には、だれにもみことばを語らなかつた。

ステパノの殉教によって、エルサレムにある教会に激しい迫害が起こって、それによって人々が散って行ったということ、私たちは 8 章で学びました。そのために、かえって人々が主のことばを他の地域にも語っていき、主の命じられたことを行い始めたことも見ていきました。出て行って、ご

自分の弟子を造るように命じておられたからです。その中に、サマリア人に福音を宣べ伝えたピリポがいました。

そして、サマリア地方だけでなく、さらに北上していった人たちがいました。フェニキアは、カルメル山よりも北に行き、ツロやシドンのある今のレバノンの地域です。そして、キプロスは地中海に浮かぶ島です。そして、アンティオキアにまで進んでいきました。エルサレムで、食卓に仕える七人のうち、ニカノルという名の人でしたが(6:5)、彼はアンティオキア出身と言われています。そしてキプロスは、バルナバの出身です。そういったつながりもあって進んで行ったと思われます。

しかし、「ユダヤ人以外の人には、だれにもみことばを語らなかった」とあります。使徒の働き2章で見ましたように、ユダヤ人の離散の民は数多くいました。アッシリア捕囚とバビロン捕囚によって捕え移されたのですが、エルサレムに帰還したのはわずかで、残りは留まっていた。そしてギリシアの時代に他の地域に移り住んだりして、ローマ時代には至るところにユダヤ人の存在がありました。アンティオキアに至っては、なんと14%がユダヤ人だったと言われています。そのような人々だけに、彼らはみことばを語っていたのです。

²⁰ところが、彼らの中にキプロス人とクレネ人が何人かいて、アンティオキアに来ると、ギリシア語を話す人たちにも語りかけ、主イエスの福音を宣べ伝えた。²¹そして、主の御手が彼らとともにあったので、大勢の人が信じて主に立ち返った。

ここで、大きなことが起こります。けれども、あまりにも誰にも広く知られない形で、大きな一歩を踏み出しています。キプロス出身のユダヤ人と、クレネ出身のユダヤ人が、アンティオキアでは、ギリシア語を話す人々、つまりギリシア人にも語り始めたということです。クレネは、今のリビア、地中海に面する北アフリカの国の中にありますが、イエス様の十字架を背負ったシモンはクレネ出身です。彼らは、ギリシア語を話すユダヤ人でした。使徒の働き6章で、ヘブル語を話すユダヤ人に対して、ギリシア語を話すユダヤ人が、やもめの配給のことで訴えたということが起こりましたね。ギリシア系のユダヤ人は、ギリシア文化の中にながらにしてユダヤ人であったので、ギリシア人とユダヤ人の架け橋になることができたのです。そしてギリシア人のほうも、コルネリウスと同じように、改宗はしていなかったけれども、神を敬う人だったのでしょう。

実は、ギリシア人がイエス様に近づいて言った時がありました。最後の週でエルサレムの神殿にイエス様がおられた時に、「祭りで礼拝のために上って来た人々の中に、ギリシア人が何人かいた。」とあり、彼らが、イエスにお目にかかりたいと言ったのです(ヨハネ12:20)。その後で、ご自分が死なれることを予告しておられます。主は、ご自分がつけられる十字架が、ユダヤ人のためだけでなく、異邦人のためでもあったことを知っておられました。そしてそのことが、今、実現します。

「主の御手が彼らとともにあった」とありますが、これは、神の働きが大きく行われている時に使う表現です。学者エズラが、バビロンからエルサレムの旅をしたのですが、「7:9 彼の神の恵みの御手は確かに彼の上であり、…彼はエルサレムに着いた。」とあります。そこで大勢の人が、信じて主に立ち返りました。悔い改めたということです。

²² この知らせがエルサレムにある教会の耳に入ったので、彼らはバルナバをアンティオキアに遣わした。²³ バルナバはそこに到着し、神の恵みを見て喜んだ。そして、心を堅く保っていつも主にとどまっているようにと、皆を励ました。²⁴ 彼は立派な人物で、聖霊と信仰に満ちている人であった。こうして、大勢の人たちが主に導かれた。

既に、エルサレムの教会は、コルネリウス一家に聖霊が降ったことによって、異邦人にも神がいのちに至る悔い改めを下さったことを知っていたので、この知らせを聞いた時、サマリアにペテロとヨハネを遣わしたように、今度はバルナバを遣わしました。バルナバ自身も、キプロス出身の離散したユダヤ人の一人で、ギリシア語を話すことを思い出してください。彼がアンティオキアに行くと、異邦人が救われていることを確認して、大いなる神の恵みを見て喜びました。律法主義に陥れば、これはおかしな動き、間違った動きとして心を苛立たせることですが、そうでなければ、これがどれほどの恵みあるかを知り、喜ぶはずです。

恵みであると同時に、その恵みに留まる勧めが今、とても必要です。それをバルナバは行いました。「心を堅く保っていつも主にとどまっているようにと、皆を励ました。」とあります。信仰を持ったばかりのテサロニケ人にも、パウロは同じ心配をされていて、自分の努力したことがむだになるか？サタンの誘惑がないだろうか？と心配していましたが、彼らが困難の中でも愛と信仰と希望に満ちていた知らせを聞いて、慰めを受けて、テサロニケ人への第一の手紙を書いています。

そして、彼が、「立派な人物で、聖霊と信仰に満ちている人であった。」とあります。立派というのは、外から来るよさではなく、内側の良さであり、神からのものです。それが、聖霊と信仰に満ちているということと関わっていて、ただ道徳的に立派な人ということではなく、聖霊と信仰に満たしに裏打ちされている人ということです。彼は、仲間から慰めの子という別名を与えられ、それがバルナバという名前です。彼の働きによって、さらに大勢の人たちが主に導かれています。

²⁵ それから、バルナバはサウロを捜しにタルソに行き、²⁶ 彼を見つけて、アンティオキアに連れて来た。彼らは、まる一年の間教会に集い、大勢の人たちを教えた。弟子たちは、アンティオキアで初めて、キリスト者と呼ばれるようになった。

覚えていませんか、サウロ、後にパウロという名になりますが、彼がダマスコに行く途上で回心して、それからエルサレムに来ました。彼は迫害者ですから、エルサレムの弟子たちは疑っ

て、恐れていましたが、パウロに復活のイエス様が現れたところから、バプテスマを受けたことなど話したのがバルナバです。サウロは大胆にイエスがメシアであることを語っていましたが、ユダヤ人が殺そうと企んでいることが知った兄弟たちが、彼を急いでカイサリア経由で、タルソに送り出したのです(9:20)。

それから10年近く経っていると思います。けれども、次々と主に立ち返る異邦人が興されている中で、バルナバはアンティオキアから200キロほど離れているタルソまで行き、そこでサウロを見つけるのです。私も2019年のトルコ旅行でアンティオキアからタルソまでをバスに乗って旅行しましたが、4時間はかかったでしょうか、かなり遠い道のりでした。しかも山も連なっている所も通り、かなり大変だったと思います。

けれども、サウロをここに連れてきた理由があり、それは、「まる一年の間教会に集い、大勢の人たちを教えた。」ということなのです。「心を堅く保っていつも主にとどまっているように」とバルナバは励ましましたが、しっかりとその信仰がキリストの内に建て上げられるために、しっかりと腰を据えて教えたのです。そのことによって初めて、信者がキリストの弟子であると知られるようになっていきました。宣べ伝えるだけでなく、教えることの大切さがここに 있습니다。エペソ4章11-12節には、キリストが牧師また教師をお立てになり、それで聖徒たちが整えられて奉仕の働きをさせることができることが書かれています。

そしてルカは、「弟子たちは、アンティオキアで初めて、キリスト者と呼ばれるようになった。」と言っています。彼がこれを執筆している当時は、キリスト者またクリスチャンは良く使われていた呼び名だったのですが、当時はまだ、他の名で、例えば「この道」という名前であったり、ナザレ派とも言われていました。しかしここ、アンティオキアの人々は、人に面白い名をよく付けていたと言われており、それで、「キリスト者」と呼んだのです。キリストというのは、ユダヤ人が救世主だと思っていた存在なのですが、ユダヤ人のキリストに取りつかれてしまったな、みたいな蔑称だったのでしょう。日本で言うと、「耶穌」です。けれども、なんとふさわしい呼び名でしょうか？キリストのようだ、というような名です。東日本大震災の救援旅行に行った時、思い出すと、現地の人たちは、クリスチャンたちのことを、神さまを信じている人たちとは呼びませんでした。自分たちに神様がたくさんいるからです。そうではなく、「イエスの人たち」というように呼んでいました。救援によって、私たちの信仰を人々にその慈善行為の中で見せていたからです。

ところで、アンティオキアがこれから、異邦人を主体にする教会になり、そこからパウロとバルナバが遣わされて、当時の小アジアに向ける宣教が始まります。アンティオキアは、ギリシアのセレウコス・ニカトルという王が、父の名にちなんで建てた町ですが、肥沃な谷に置かれた大商業都市でした。ローマ時代にはローマ、アレクサンドリアに次いで第三に大きな都市になりました。創立の時から国際都市でした。今のトルコの町アンタキアに、博物館がありますが、訪問したら、ロー

マ時代のモザイク画が延々と展示されていました。ものすごい都市です。それと同時に、他のローマの大都市と御多分に漏れず、偶像礼拝の盛んな町です。ダブネーというギリシア神話の女神が祀られていて、女祭司という名の売春婦がたくさんいました。

このように、商業の発展、国際都市、富と退廃、偶像崇拜が混じりあったところですが、こういったところが、パウロたちを遣わす宣教の拠点となる教会となっていくのです。

2B ユダヤへの救援 27-30

²⁷ そのころ、預言者たちがエルサレムからアンティオキアに下って来た。²⁸ その中の一人の名をアガポという人が立って、世界中に大飢饉が起こると御霊によって預言し、それがクラウディウス帝の時に起こった。

バルナバに続いて、エルサレムから預言者たちがやってきました。霊的な支援をしていきました。アガポという預言者が、大飢饉を御霊によって預言しましたが、クラウディウス帝の時に何度となく起こったことが歴史に残っています。

ところで、先ほどの話に戻りますが、聖霊の超自然的な働きが使徒時代で終わったとする立場の人は、「預言は聖書が完成したことによって役割が終わった」とするのです。そうでないと、完全な、最終的な啓示である聖書に付け足すことになるからだ、ということなのです。ここで誤解されているのは、預言の性質です。

もちろん、神のみことばとして普遍的で、生活と信仰の規範となる啓示は、聖書をもって完成しました。エペソ 2 章 20 節には、「使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられていて」とあります。ここでの預言者は、旧約時代の預言者を含む預言であり、聖書全体のことで、す。けれども、このアガポという預言者は、世界中の大飢饉という局地的なこと、限定的なことを預言しているにしか過ぎず、聖書にある啓示とは性質を異にしているものです。コリント人への手紙第一では、一般の信者たちが預言している様子が出てきます。11 章 5 節には、「女はだれでも祈りを預言をするとき」とあります。14 章は、預言は異言よりも優れており、「御霊の賜物、特に預言することを熱心に求めなさい。(1 節)」とあります。その場に限った預言、またその時に限った預言、そして聖書に書かれていることに矛盾せず、その原則に沿った預言であれば、今も有効です。

²⁹ 弟子たちは、それぞれの力に応じて、ユダヤに住んでいる兄弟たちに救援の物を送ることに決めた。³⁰ 彼らはそれを実行し、バルナバとサウロの手に託して長老たちに送った。

ここでは、アンティオキアの弟子たちが、ユダヤにいる兄弟たちに物質的な面で支援しています。アンティオキアは豊かな都市であったので、備蓄も多かったのでしょう。また、エルサレムはすべて

の財産を売り払って、それを共有していたので、財政的にうまくいっていなかったのかもしれませんが。その時に大飢饉が来たのです。

こうやって、エルサレムからは霊的な支援がアンティオキアに来ましたが、ここでは物質的な救援がアンティオキアからユダヤの方に行ったのです。パウロは、この原則をローマ 15 章でこのように教えています。「ロマ 15:27 彼らは喜んでそうすることにしたのですが、聖徒たちに対してそうする義務もあります。異邦人は彼らの霊的なものにあずかったのですから、物質的なもので彼らに奉仕すべきです。」

このようにして、ユダヤ人が主体の教会と、異邦人主体の教会の交流が始まりました。天の幻から始まり、聖霊のバプテスマの約束が異邦人に与えられたのが決定的となり、それで壁が壊されたキリストの教会です。彼らはその一致を実践しました。ただ頭だけで、知的な理解だけで一致したことを認めたのではなく、霊的な賜物によって励まし、また困窮している兄弟のために救援を起こり、そうやって具体的な行動によって一致していることを見せていきました。私たちも、ただ頭の中で一つになっていることを認めるだけでなく、行いによって示していきましょう。